

# 異業種における高齢者の音楽療法についての一考察 ～ アメリカにおける論議を例に ～

## A Study of the Music Therapy for Elderly in Various Occupations — A Discussion of This Therapy in the U.S.A. —

(2007年3月31日受理)

三 川 美 幸

Miyuki Mikawa

Key words : 高齢者ケア, 音楽療法, 音楽を使用した活動

### 要 旨

わが国において音楽療法という新しい分野が普及し始め、社会的な関心も高まっている中、高齢者施設での音楽療法には、実際には様々な職種において行われているのが現状である。その音楽活動の内容は、受動的に音楽を聴くものから、能動的に演奏活動に関わるものまで多岐にわたっている。本研究では、アメリカにおける音楽療法士以外によって行われた高齢者の音楽療法に関する研究を中心として、看護・作業療法・理学療法における音楽療法士以外の分野でどのように音楽が使用されていたかを考察し、音楽療法の専門性に関する示唆を得た。

### はじめに

高齢者を対象とする音楽療法は、音楽療法が普及しているアメリカにおいて、精神科・障害児領域と並んで、主な領域の一つであり (AMTA, 2002), わが国においては、現在最も需要の多い領域の一つとなっている (村井他, 2001: 日本音楽療法学会, 2005)。

音楽療法は、新しい分野であるが、近年わが国では、特に高齢者領域において多くの関連書籍が出版されるようになったことから、社会的にも関心が広がってきたことが伺え、様々な形態の音楽活動が“音楽療法”と呼ばれるようになってきている。

日本音楽療法学会の実態調査として行われたアンケート調査(2005a, b)によれば、音楽療法は、介護職等の他の職務の一つとして勤務の中で実施されているか、ボランティアの活動の一つとして提供されているものが6割以上を占めているのが現状である。すなわち、音楽療法士が音楽療法を実施しているのではなく、音楽療法士以外の職種において、音楽の利用をしていることが音楽療

法として捉えられているのである。

このようなわが国の現状をふまえて、音楽療法の専門性を探っていく一助として、音楽療法の普及しているアメリカでは、実際には音楽療法以外の職種にどのように音楽が利用されていたかを概観する必要があると考えた。

よって、本稿では、アメリカにおける高齢者領域の音楽療法に関する研究の概観と音楽療法をめぐる論争を中心に高齢者領域における音楽療法について考察を行う。Music Therapy(音楽療法)という言葉は、通常、音楽療法士によって実施されるものを示すものである。しかし、いくつかの文献においては、Musical Intervention(音楽的な介入)、もしくはTherapeutic Intervention(療法形態)という言葉を使用しているものもある。したがって、本稿では、音楽療法士によるものと非音楽療法士によるものの音楽療法の定義が不明確であるため、音楽を使用した活動を、すべて音楽療法という言葉で述べる。

## 高齢者領域における音楽使用の背景

高齢になると、身体機能が衰え、自分の身の回りのことが次第にできなくなるため、デイケアセンターへの通所や専門の施設への入居によって、ケアが行われることが多い。しかし、施設を利用するにあたって、高齢者は、今までの生活と異なる毎日や新しい規則、職員による対象者の個人スペースへの侵入、十分に利用者に関わりがない職員、などいくつかの問題に遭遇していく (Wigram 他, 2002)。加齢により、人間は、新しい環境へ適応することが難しくなるものであるが、このような事が重なることにより、心身ともにストレスが加わり、新しい環境に適応が困難になる。また時間の経過とともに、身体機能は低下し、次第に意思伝達・表現が思うようにできなくなり、他人と関わるのが難しくなり、最後には、個人の尊厳までもが失われていくのである。

このような現状をふまえ介護福祉の現場では、高齢者施設内で時間を過ごすという場を提供するのではなく、リラクゼーション、身体機能・社会性・認知機能向上への支援、問題行動の減少、コミュニケーションの促進を目的として、いかに生活の質の向上を計るかに焦点が当てられて、様々な医療福祉専門家が関るようになってきた。上記のような目的を達成する活動の一つとして、音楽を使用した活動がある。特に、1980年代から、アルツハイマー型の認知症に対しての研究が進むとともに音楽を高齢者ケアに使用することが注目されるようになり、このような音楽活動は、音楽療法士以外の、施設職員や医療従事者にも幅広く応用されるようになった。その内容は、歌を一緒に歌ったり、聞いたり、また一緒に楽器を演奏することを通じて、機能が失われた対象者に回想を促したり、非言語コミュニケーションの促進を図ったりなどである。

## アメリカにおける高齢者の音楽療法

音楽と認知症に関するBrotonsとKogerの研究によれば、1985年から1996年に出版された文献は、計69存在している。その半数以上は、1992年から95年に出版されたものであり、この時期から高齢者ケアへの認識が高まったことがわかる。研究者の内訳については、音楽療法士

が関わったものが48% (33文献)に対し、著者の分野が不明なものが12文献、看護師が10文献、医師が1文献、理学療法士、2文献、作業療法士1文献である。すなわち、音楽療法士以外の著者が52%に達し、その半数以上が音楽療法士以外の職種によって、音楽が臨床に用いられていたことになる (1997)。

これらの音楽療法の内容は、以下に例を示すが、録音音楽(既成音楽)を聞かせる受動的な関わりから、楽器演奏を行うような能動的な関わりまでと、幅広く色々なレベルで行われている。このことから、音楽を利用することに対して様々な角度から高齢者ケアに対して関心が向けられ、多種多様な職種によって使用されていることが伺える。また、ケアに関わるものの音楽技能・音楽の使用法に関しても同様であったと推測されるが、実際どのように相違があったのであろうか、幾つかの例を挙げながら以下に考察をしていく。

## 看護領域における音楽療法と論争

Brotonらの研究に挙げられた計69文献の内、看護師によるものは、10文献を占めている(1997)。看護師は、高齢者ケアにおいて、彼らの日常生活と密接に関わりをもつ分野であるから、医療関係者の中でも、特にケアの向上のために音楽を使用することに高い関心を持っているといえよう。

看護師による音楽療法は、高齢者が好むとされる音楽をオーディオ機器を使用して対象者に聴かせる、もしくは、それを伴奏として一緒に対象者とロズさむ等の活動が典型的であった。その一例としてGlynnのカセットテープでの録音音楽を使用した研究を紹介する (1992)。

看護師のGlynnは、20名のアルツハイマー型の高齢者に対して、独自に選曲した高齢者にとって馴染みであろうと思われる録音音楽を30分間カセットテープレコーダによって聞かせ、これに対する反応を独自の行動変化尺度によって評価した結果、記憶や回想を促し、社会性・コミュニケーションを向上させることが出来たと報告している (Glynn, 1992)。Glynnは、音楽を使用した効果を評価するためにRichardson's Nursing Observation Guideを基にして独自の音楽療法アセスメントツール (Music Therapy Assessment Tool: MTAT, 音楽療法査定)

を作成し、看護学会誌上に発表した。

しかし、この研究に関して、後にMacleanとLipeの2人の米国認定音楽療法士によって抗議がよせられ、紙上で返答が行われた(Lipe, 1992; Maclean, 1993)。

最初にLipeが指摘した2つの問題点について述べる。まず、Glynnが音楽療法の存在について触れていないことである。音楽療法に関する研究は、1950年代から始まっており、学会も設立されていたにもかかわらず、Glynnは先行研究として、アルツハイマー患者に音楽を療法的に使用したものは、存在しないと述べており、その存在すら認識していなかったのである。

2つめは、研究の方法論自体に問題があると考えられる点である。例えば、Glynnの選曲は、彼女が単に高齢者にとって“馴染みがあるであろう”との推論によって選曲されており、音楽が音楽刺激としてこの研究において使用される事については、何の理論的根拠も示されていない。これに付け加えて、看護領域で使用されるRichardson's Nursing Observation Guide (コミュニケーションにおける感覚認知能力を計る尺度)を基にGlynnが作成したAMTAの正当性に対しても疑問を呈しているが、それは、このMTATの数値が示すものと、音楽の機能と刺激による対象者の反応の間には、何の関係性も述べられてはいないからである。

Lipeのこのような指摘に対して、Glynnは、音楽を基盤とした研究が発展していることを嬉しく思うと返答しながら、研究を行った時点では、音楽療法文献の存在を記載することが出来なかった、と主張している。そして、この研究の音楽使用に関しては、Glynnなりの根拠があったと反論している。

彼女の主張によるとは、高齢者にとって馴染みがある音楽(特別なりズムパターンをもつ旋律)を選曲して使用する事は、郷愁を誘い、回想を促進するため、対象者の社会性とコミュニケーションを促進するために使用する事が出来るからということであった。そして、この彼女によって作成されたアセスメントツールは、あくまでも看護師が音楽を使用した介入を行った場合において、いかにその介入が生活の質の向上に貢献するかを示す一尺度として想定されたものであって、アルツハイマー患者と音楽介入の生理物理社会的相互作用を実際に示すような厳密なものではないことを強調している。付け加

えて、看護師は、音楽家ではないので、患者に生の演奏を提供する必要はなく、ステレオ機材を用いた音楽を適切な状態で提供することが、看護ケアにおいて適切な療法的な媒体としての音楽使用を意味するものであると述べている。

このような経緯から、Glynnは、音楽療法文献に対する認識がなかったことを曖昧にしていることが分かるが、おそらく看護分野においては、当時、音楽療法は、その分野すら認識されていなかった現状があったのではないかと考えられる。

上記の論争がなされた1年後には、別の音楽療法士Macleanによって、再度このGlynnの研究に対して抗議がよせられた。彼女は、看護師であるGlynnによって選曲された音楽を30分間、ただ対象者に聞かせるこの活動に対して、“Music Therapy(音楽療法)”という言葉を用いたこと異議を唱えたのである。Macleanは、音楽療法という分野は、学位を取得した、専門的な訓練を受けた療法士が行う専門分野であるため、Glynnの行った事は、音楽療法としての意味を持つものではないと訴えている。そして彼女の研究に対して、Lipeと同様に、音楽療法分野に対する認識の欠如をふまえて、先行研究の貧弱さを指摘しながら、このような記事が掲載される事によって、ヘルスケア領域の中で音楽療法が退却してしまうとの危惧までも示し、辛らつに批判を行ったのである。この抗議に対して、Glynnは、単に“Therapeutic use of music(療法的な音楽の使用)”の意味で、“Music therapy”という用語を使用しており、あくまでも看護師が使用できる可能性のあるTherapeutic modality(療法的形態)としての音楽使用であったことを明記すべきであったと弁明している。そして、看護師は、決して音楽療法士と称することはなく、自分の文中においても、看護師を音楽療法士として取り扱ってはいないと主張している。しかしながら、看護師は、音楽を看護領域の現場において、現実的に療法的な形態として自由に使用する事ができると主張している。

上記のMTATを評価尺度に用いて、音楽が高齢者の介入に効果があること報告している研究は、他にも存在する。Sambandhamによる研究では、19人のアルツハイマー型認知症を伴う施設入居者に対して、1週間に2回60分間、録音された音楽をオーディオ機器によって聴かせるものを

音楽セッションと呼びであり、これを3週間に亘って実施している。この結果、音楽を聴かせる事は、高齢者の残存能力に働きかける一つのコミュニケーションの方法である事が明らかにされ、言語的・非言語的表現が音楽セッションの後20分間保持されたとしている。使用された音楽の曲名は、明らかにされてはならず、家族からの推薦によって選ばれたものを使用し、特にビックバンドのジャンルが人気を集めていたと記している。

また他の研究として、音楽を聴かせる事で、問題行動が減ったとの症例もある。対象者は、認知症のために言語では会話が難しく、また集中力の欠如の為に施設内で落ち着くことが出来ず、他の利用者に対して、問題行動を起こしていた。しかし、看護師である著者が、対象者の好みの音楽を探りながら音楽を聞かせてみたところ、対象者が静かに音楽に耳を傾けるようになった。そして、対象者の問題行動は減少し、時には、笑顔を浮かべるともみられ、他の利用者と関わるようになったと報告している (Lloyd & Diekelman, 1992)。

この事例においては、音楽は、対象者とのコミュニケーションを発展させるきっかけをもたらす、非言語的媒体として用いられたと考えられる。そして、意思疎通が出来るようになった事で、対象者は、自ら置かれた環境の適応が徐々に促進されたと推測される。この経験を、Lloydは、非言語媒体である音楽が対象者の心へ直接届く力に驚き、たとえ対象者が重い認知症を患っていたとしても、わずかな時間であったとしても、その人が心安く過ごす姿を見つけ出す事が大切であることに気づいたと述べている。

しかしながら、この報告は、看護師が高齢者と如何に介入を行うかを試行錯誤している中で、音楽という媒体が見つかった一例にすぎず、特に音楽療法を意識して行っていたのではないと考えられる。

この様に、看護領域では、音楽の使用に関して意識的に音楽を使用するものもあれば、そうでないものも見受けられるが、どの事例においても共通なのは、音楽が、対象者とコミュニケーションを取るための単なるきっかけとして使用されている点である。これは、看護師が言語を主なコミュニケーション手段として使用しているために、言語・認知機能の低下した高齢者と接する際に、直面する問題なのであろう。だからこそ、非言語的のコミュ

ニケーション媒体としての音楽の使用が、看護師にとって求められるに至ったと考えられる。

## 作業療法における音楽療法

上記のBrotonsの研究では、作業療法士による報告は2例にすぎなかったが、実際の国内外の文献を外観してみると、作業療法の分野において音楽の使用に対する注目が高くなっていることが分かる。

一例を示すと、日本の作業療法学では、2003年の学会誌上において音楽療法の特集記事が掲載されている。その中には、「音楽活動のできるOT（作業療法）は、それだけでセールスポイントを持つ事ができる」との記述があり、21世紀の就職戦略傾向として自分でなければできない技術のひとつとして音楽活動に注目している事が分かる (山崎, 2003)。そして、この記述によって、作業療法士が、音楽活動を多く取り入れている現状が推測される。

音楽療法と同様に、作業療法の分野にとっても普及国であるアメリカ作業療法学会の学会誌の中にも、そのアプローチに音楽を使用する事を推奨する文献が幾つか存在する。MacRae(1992)は、“Should Music Be Used Therapeutically in Occupational Therapy?”と題する記事を学会誌に投稿している。作業療法は、精神・知的・身体的障害には場広く用いられ、人々の生活機能に関わる運動・感覚・認知・感情これら全ての領域に働きかける。彼によれば、この療法は創造的で達成感のある活動であり、音楽は、上記の事に対して働きかけを行う理想的な方式であると主張している。

Heckによると、作業療法において、音楽は、痛みの緩和、運動や感覚機能障害、認知障害に対して応用されてきた。痛みの緩和においては、達成感のある活動を促す事で痛みから気をそらせ、リラックスを促すことで最終的に痛みを軽減することができるため、同質の原理を用いて、対象者の気持ちに添った録音音楽をBGMとして用いたり、視覚的なイメージを用いながら、音楽のリズムあわせて呼吸をすることなどがある (Heck, 1988; MacCormack, 1988; Boyer 他, 1989)。

Deusen(1987)によると、運動や感覚機能障害においては、カセットテープを使用して詩と音楽による伴奏にあ

わせてダンスする事で身体機能が向上したとの報告がある。また、Holm(1984)は、アルツハイマー型認知症の対象者に対して、音楽を使用することで、問題行動と見なされる反復的言語活動が減少したと述べている。音楽のジャンルは、リラックスするクラシック音楽(パッヘルベルの“カノン ニ長調”),あるいは、対象者の好む音楽(“Old Rugged Cross”, “Los Gitanos”)を使用している。Holmは、先行研究の記述の中で、Friedの研究について触れ、音楽は、身体的・精神的な影響を与えるので、音楽を使用する事で基本的な注意を促す事ができると記述しているため(Fried, 1990 in Holm, 1984),これを応用したものと思われる。そして、音楽は、対象者が好む音楽を選択して用いることが必要であり、認知症の対象者は通常、音楽を喜び楽しんで受け入れる。それらの音楽は、特に、リラックスさせる、静かなクラシック、伝統的、宗教的な音楽である(Cook, 1981, Knopman 他, 1990 in Holm, 1984)と述べていることから、先行研究からの情報が背景にあったため、上記の様な音楽選択を行ったと考えられる。

Holmは、作業療法の場合には、上記の例のようにある特定の領域において音楽が使用されることが多く、療法的なツールとして全面的に使用されることがないと述べており、精神の健康や社会性の機能に働きかけるものとしての研究はなされていないことを明らかにしている。実際には、これらの領域に関しても、音楽の効用は認められて使用されているのではあるが、臨床に関して音楽を使用する基準や臨床結果が存在しないと、作業療法の中での療法的なアプリケーションとしての音楽の基盤を考察していく必要があると述べている。この事は、作業療法独自の音楽の使用法についての基盤を模索していくという、二次的手段としての音楽使用ということがすでに認知され、音楽療法とは異なった分野であるとの認識があると捉えられよう。また、作業療法では、音楽がある環境も作業の一つと捉えられる為、“注意を反らす”などの特定領域に留まった音楽使用になるのではないだろうか。

作業療法での音楽使用は、看護領域とは異なり、人々の生活全てに働きかける機能に対して支援していくために、音楽が使用されている。しかし、その使用方法においては、カセットテープを使用するなど、看護領域と同

様で、BGM的な役割を果しているといえよう。

## 理学療法における音楽療法

Brotonらの研究の理学療法の分野においては、1例を紹介するのみであるが、音楽は、身体的動作を促す媒体として、この分野においても多く利用されている。

Pomeryの研究によれば、重度の認知障害のある高齢者に対して音楽と動作を組み合わせた理学療法を1週間に1度、30分行ったところ、運動能力の向上が極めて高くなったという報告がある(1993)。作業療法と同様、身体が音楽に反応するという性質を理学療法においても利用するという事は、主に身体機能を向上させるこの領域にとって有効な手段となった事は、明らかである。

理学療法においては、身体機能に着目する為、音楽は、運動を促進させるBGMのようなものとして、利用されている事が特徴として挙げられる。

## 考 察

上記の領域における音楽療法を概観することから、音楽療法が抱えている2つの問題点が、明らかとなった。まず、音楽療法という領域が、医療現場において明確に認識されていなかったという事である。看護領域におけるGlynnの研究を例に挙げると、高齢者ケアの中でも特に注目されるようになったアルツハイマー患者に対する音楽の効用に関する先行研究の存在を知らず、自らが行った研究を音楽療法という言葉によって論じている。しかし、実際には、音楽療法学会はすでに設立されており、認定制度も確立されていたため、アルツハイマー患者に対する音楽療法研究も幾つか存在していたのである。このことから、音楽療法と療法的な音楽使用という、全く異なった意味を持つ2つ言葉が混在し、普及国とされるアメリカ合衆国においてさえも音楽療法の専門領域が明確にされていなかった事が明らかとなった。

1990年代に入ると、他職種における研究の参考文献において音楽療法の先行研究が引用され始めるようになり、音楽療法領域の認識が広まってきた事は明らかである。実際、前述の研究においては、Music Therapy(音楽療法)という語彙がもちいられるより、む

しろ“therapeutic modality”（療法的な媒体）もしくは，“therapeutic use of music”（療法的な音楽使用）という言葉が多く使用されており，他職種においては，音楽療法の分野に対する認識は浅かったが，音楽を使用すれば全て音楽療法を行っていたというような認識はされていなかったといえるであろう。このことから，音楽療法という分野の存在は認識しているが，実際に音楽療法という領域については深く理解がされていないことが問題だったのではないだろうか。米国で起こった上記のような問題は，音楽療法士という新しい分野が確立されていないわが国にとって，“音楽療法”とはなにかを改めて認識する必要があることを示唆している。

現在では，音楽療法士の認知度は以前に比べて向上し，この言葉が混在する事は減少したと推測される。しかし，10年以上経った現在においても，音楽療法は，特に医療領域における理解は薄い。そのため，高齢者ケアにおいても，入居施設においては多く取り入れられているが，病院など的高齢者ケアにおける臨床が行われていないように思われる。これは，医療と音楽療法間の相互理解や連携が，未だ進んでいない事を表していると思われ，今後，どのように様々な専門領域において，音楽療法士が関わっていく必要があるのかという問題も提起しているのではないだろうか。

もうひとつは，上記のように，音楽は，対象者に対しての介入の媒体として，音楽療法士以外の職種において目的達成のために様々な形で高齢者ケアに利用されていることが明確となった。これらの分野における音楽は，単なるコミュニケーションのきっかけとしての利用や，リズムなどの音楽要素を用いたBGM的な利用などにとどまっており，特に使用される音楽に関して詳細な説明がなされていないことからしても，そのアプローチの行使に関りかならずしも専門的な音楽的な技能や知識を必要とはしていないことが分かる。そのため，主として録音された音楽が使用されており，明確な根拠に基づいて選曲されているのではないことが明らかとなった。

看護師のSambandhamは，高齢者との介入に際して録音した音楽についての研究において，「音楽によってある程度の目標達成を行うには，洗練された技術は，本質的なものではない。」と述べているが（Sambandham & Schrim, 1995）。彼女は，音楽療法のトレーニングを受

けていない看護師でも音楽を介入の手段として使用することによって，高齢者の軽視されがちな精神・感情面におけるケアに貢献できるとしている。

多様な文化背景を持った高齢者領域における音楽療法は，児童や精神領域と比較して，上記のように手軽に音楽を介入に利用することで，多種多様なアプローチの可能性が広がるのが特徴であるといえるであろう。しかし，オーディオ機器の発展やメディアの進歩により，音楽が身近に利用できるようになったことは，音楽療法領域の専門性の不明瞭さを生じさせる一因となっていると思われる。Sambandhamの記述から，音楽療法とはなんであるかを，単にオーディオ機器等によって手軽に音楽を使用できる範囲での利用を超えて，例えば音楽の非言語的性質を利用したコミュニケーションのように，音楽を第一義的に使用する事に対して深く今後考察していく必要があることを示唆していると考えられる。

## おわりに

Maclean (1993) は，上記のような状況に対して，“我々がいらだたくと思うのは，他の職種の人々によってよく音楽療法が専門分野として理解されていないことである”と看護師Glynnの研究に対して苦言を呈しているが，いまだに音楽療法は新しい分野であり，この現状は未だ続いているといえよう。音楽療法士が他の専門職と学際的な関わりや連携などを通して，しっかりとその役割を確立していく必要があるであろう。高齢者の音楽療法においてどのように第一義的に音楽が使用され，その専門性については，どのような技能が必要であるかを問うことは今後の課題としたい。

## 参 考 文 献

- 村井靖児，坂上正巳，馬場存，他（2001）わが国の音楽療法の実態に関する研究，国立音楽大学「音楽研究所年報，35-62
- 日本音楽療法学会（2005）「会員アンケート」調査結果，日本音楽療法学会
- 日本音楽療法学会（2005b）「会員アンケート」調査結果抜粋版，日本音楽療法学会

- 山崎郁子 (2003). 作業療法士による音楽活動の実際, 作業療法ジャーナル, 37(2), 113-117.
- American Music Therapy Association (AMTA) . (2002). AMTA member sourcebook, 2002.
- Boyer, J., Colman, W., Levy, L. & Manoly, B. (1989). Affective responses to activities: A comparative study, The American Occupational Therapy 43(2), 81-88.
- Brotons, M. & Koger, S. M. (1997), Music and dementias: A review of literature. Journal of Music Therapy, 44(4), 204-245.
- Boyer, J., Colman, W., Levy, L. & Manoly, B. (1989). Affective responses to activities: A comparative study, The American Occupational Therapy 43(2), 81-88.
- Cook, J. D. (1981). Therapeutic uses for music: A literature review, Nursing Forum 20, 252-266.
- Deusen, J. V., Harlowe, D. (1987). The efficacy of the ROM dance program for adults with rheumatoid arthritis, The American Occupational Therapy 41(2), 90-95.
- Glynn, N. (1992). Music therapy assessment tool in Alzheimer's patients. Journal of Gerontological Nursing 18(1), 3-9.
- Freid. (1990 ). Integrating music in breathing training and relaxation: T. Applications. Bio-feedback and Self -Regulation 15(2), 171-177.
- Heck, S. A. (1988). The effect of purposeful activity on pain tolerance, The American Journal of Occupational Therapy 42(9), 577-581.
- Lipe, A. (1992). Musical debate. Journal of gerontological nursing 18(7).
- Lloyd, S. & Diekelman, N. (1992). Find the key, Nursing Times 88(32), 48.
- MacCormack, G. L. (1989). Pain Management by Occupational Therapy, The American Journal of Occupational Therapy 42, 582-590.
- Maclean, B. (1993). Music debate continues. Journal of gerontological nursing 19(2), 5-6.
- MacRae, A. (1992). Should music be used therapeutically in occupational therapy?, The American Journal of Occupational Therapy 46(3), 275-277.
- Pomeroy, V. M. (1993). The effect of physiotherapy input on mobility skills of elderly people with severe dementing illness, Clinical Rehabilitation, 7, 163-170.
- Sambandham, M. & Schirm, V. (1995). Music as a nursing intervention for residents with Alzheimer's disease in Long-term care, Geriatric Nursing 16(2), 79-83.
- Smith, G. (1986). A comparison of the effect of three treatment interventions on cognitive functioning of Alzheimer's patients. Music Therapy, 6(1), 41-56.
- Vink, A. (2000). A survey of music therapy practice with elderly in the Netherlands, ed Aldridge, D., Music Therapy in Dementia Care, 119-138, London; England, Jessica Kingsley.
- Wigram, T., Pedersen, I. N., & Bonde, L. O. (2002). Comprehensive Guide to Music Therapy. London; England, Jessica Kingsley.